

老化!する創作力 高齢者のアート現場に関する研究

要旨

近年、日本国内では高齢者の社会参加を支援する芸術文化事業が多くみられ、政府、NPO組織、教育機関などの協働事業は多方面から高齢者が芸術文化に触れる機会の創出に努力している。その中でアートの視点から高齢者と芸術文化の関係を捉える学術研究は少ない。アーティストが書いた関連論文や記事はほとんどないことがわかった。人と関わるアートの研究において、アーティストはいつも人間性や感性などをめぐって語っている。しかし、アートの側面から人間の本質に迫るときに、なぜアーティストは高齢者をあまり巻き込まないのだろうか。このような疑問を抱いたのが本研究のきっかけである。本研究は、超高齢社会が進化した現代において高齢者に関するアートの社会実践が中心的なテーマである。

本研究の目的は、認知症とともに生きる高齢者に焦点を当てながら、創作力が弱くなっても表現する力、ひいては生きる力はあるということをアートの実践の視点から確かめることである。一般的に、高齢者は弱い立場で、社会から無視されがちな存在である。本研究では、高齢者にアートが必要な理由や、高齢者のアート創作の日常化に価値があるのかどうか、彼らの創作の源泉を明らかにする。最後に、筆者と関わった高齢者の日常生活から創作力を記録し、アーティスト・イン・レジデンスを通して高齢者デイサービス（通所介護）に滞在するといった活動など、そのいくつかの成果を社会に広げる試みについて論じる。高齢者の創作に基づいて、筆者が作るオブジェをより多くの人と共有し、多くの人たちに高齢者に対する意識改革の提言を示す。

本研究は以下の構成となっている。

まず第一章では、現在の芸術文化事業における高齢者のアート現場での事例をめぐって、活動現場を福祉施設内という「うち」と、外部である社会という「そと」に分類し、近年の新しいアート拠点の特徴を挙げ、いかに高齢者と関わるべきなのかを検討する。アートの視点から高齢者と芸術文化の関係を捉える学術研究が少ない理由としては、高齢者は認知機能衰退のために創作活動の意欲が低下しているという先入観があったり、高齢者を対象に広範囲に研究を行うこと自体が難しいといったことが挙げられるだろう。本章では、今まで多く語られてきたようなアートによる社会参与の効果やその評価といった研究とは異なる側面も、アートの視点から考察する。

第二章では、創作とは人間の本能であり、人間の追求である、という本質への回帰を論じる。人間は高齢になるまで活発な創作活動を行うと一般に考えられているが、本当に老化と共に創作意欲は減退するのかどうか。これらを精査、検証しながら、人間は老化してもアート創作が必要だと論じていく。アート創作と人間の成長との関係から、二つの事例を通して高齢者のアート創作の可能性について論じる。一番目の事例はアメリカの高齢者画家グラ

ンマ・モーゼスである。彼女の経歴と身近な事柄や自然観察を表した風格が、当時、人々の心を惹きつけた。二番目の事例は無名の70代の女性である。彼女の絵はアール・ブリュットとして、生きる力を人々に伝えた。創作は高齢者が自分の人生を見つめ直し、自分を癒すための手段であると同時に、アートが生活に取り込まれることの意義を周囲に伝えることができると言える。最後に、高齢者の生活や創作に影響を与える最大の要因である認知機能の障害について改めて考察する。

第三章では、認知症になっても、創作力はまだ完全には衰えないことを示す。最初は、認知症の画家の実例を通して認知症病期の進行による“描く”能力の変化を分析する。次に、筆者の数年にわたる高齢者をケアする経験から認知症高齢者のアート創作の問題点を提示する。最後に、認知症高齢者にとっての創作の源は記憶だということを提示したい。

第四章では、筆者の高齢者デイサービスでの滞在活動と高齢者の日常生活における創作力を発見する方法を述べる。博士展示作品では、いくつかの高齢者の創作に基づいて、筆者がオブジェを作り、それを来場者と共有する。

結論では、アーティストたちへの助言を提案する。アートと高齢者に関する現在の問題点をまとめ、福祉社会において必要だと考えられる芸術活動について提案する。アーティストたちは、自己表現として、そして社会的評価を目指して作品の創作に集中する一方、どのようにして浮足立たずに芸術の役割を見出すことができるのかを提言する。

医学的に高齢者を語る際、認知機能も含め、身体機能が「衰退する」と表現されることがある。しかし、それは高齢者の存在自体が「衰退」という意味とイコールではないと考える。高齢者という存在・概念の中には、老化・衰退以外にも様々な要素が含まれている。そのさまざまな要素に安易にネガティブなレッテルを貼ることがあってはならないと思う。

このような問題に向けてアートのアプローチに意義があることを述べ、論を閉じる。